

幽靈船

yae-mon

この怪談の時代背景と登場人物については、物語の口述者であるハツノ祖母の伝記・[「ハツノ祖母の思い出」](#)をご覧ください。

時は明治時代の終わり頃のこと。

梁吉は、台湾と朝鮮を結ぶ海運事業の軌道乗せのため、持ち前の帆船で息子の国助とともに何度か玄界灘の道筋を航海していた。

そうしたある冬の夜、乗員六人で玄界灘を航行していたときのことだ。霧が深くなり、このままでは航行が危ぶまれたので、夜は通常、見張りに一人立たせるところを、この時は二人立たせて、残りの者とは何時間かごとに交替することになった。

事業主の梁吉も船長の国助も仮眠していたとき、甲板が急に慌ただしくなり、見張りの一人が船室に飛び込んできた。

「おお、船長。起きてください。前のほうに船が居て、近付いとるんじゃ」

国助は急いで起き上がり、顔を両手でこすると甲板へ出た。

霧でぼやけているが、いくつものカンテラの光らしいものの連なりが見えた。

「まん前に居るなあ。こっちのランプも、もう三つ四つ点けてきてくれ。進路、取舵いっぱい」

操舵手が舵を左にいっぱいに切った。

船が大きく傾くと、やがてぐうっと相手の光が進路前方から右にそれていった。

だが、何かがおかしい。光が、また進路にかぶさるように入ってきたのだ。

「なんだこれは、とてつもなく速いじゃないか」

まだ正体は何なのかはわからない。ただ、光が大きさを増したから近付いたことはわかる。

それにどうやら光の高さ加減から、こちらよりも大きな船のようだ。

船員達は異常な光景に、ただ光のほうを見入っていた。

いつしか国助が舵を握っていた。前方に光が回ったとき、面舵をいっぱいに切った。大きく船は傾いた。

「どうか間違いであってくれ」

だが、向うの光は願いに反して予感どおり、また前面に急速度で回ってきた。

「こいつは、噂に聞く幽霊船だ」と、国助が震えと脂汗の中で思ったそのとき、霧の晴れ間からカンテラを点けた幽霊船の右舷がついに見えた。

それは波間を滑るようにして進んでいるのだった。

「船長、もう駄目だ。あいつは気遣いだ。おれたちと心中するつもりらしい」

「俺はまだこんなところで死にたくない。どうにかならないか」

みな蒼白の顔をして、甲板をただおろおろするばかりで、近付いてくる船を眺めていた。

国助は、なんとか相手をかかわそうと必死で、もう一度取り舵を切ろうとしたとき、後ろから梁吉の大声がした。

「国助よ、やめておけ。これは幽霊船に違いない。ならば、実体があるとは限るまい。もうここまで近付いたら、どうにもならん。みんな、うろうろせずに船室へ入っていなさい。幽霊なら相手にしなければ去っていく。さあ入れ入れ」

国助は舵を放し、皆放心したように船室へ向かったが、現実に見えるものに対してどうして平静で居られよう。皆、固唾を飲んで衝突の時を待った。

梁吉は、玄界灘に幽霊船の出るという噂は聞いていたが、どう処すれば良いかまで知っていたわけではない。

玄界灘の荒海のため、多くの船が遭難し、多くの者が犠牲になってきた。

だが、誰弔う者もないため、浮かばれぬ霊達が仲間を求めて幽霊船を繰り出し、生きている者を同じ境遇に引き込もうとして、甲板に居るものを慌てさせ転落させたり、舵取りを誤らせて船を転覆させたり、暗礁に導いたりするという。ならば、こちらが動じなければ良わけだ。

間もなく正面衝突するまでになっていただろう。皆押し黙り、ある者は目を堅く閉じ、背中を丸めて震えた。目をぎよろぎよろさせて何かに拝んでいる者も居た。

梁吉は腕を組んで天井を見すえ、国助は歯を食いしばっていた。

カンテラを煌々と点けた舳先の大きい船が、まさにこの船に衝突するという光景が皆の脳裏をかすめた。今がその時と思われた瞬間だった。

「ボオオオ〜ン」という鈍い響きがして、やがて蒸気のようななま暖かい空気が皆の顔の前をよぎっていった。

ひとしきり置いてみな外に出てみると、あの船はどこにも居らず、あれほど濃かった霧は薄らいでいた。

私の祖母の父である国助は、その後の航海のなかで、何度か幽霊船に遭遇し、火を出して燃える海からそそり立つ山の幻影なども目撃したという。

こんなことが何度もあったにもかかわらず、国助は十八才から航海を始め、六十才で船を下りるまで、一度も遭難するようなことはなかった。

それというのも、航海するときは必ず、着衣などを海に投げ入れて、死者の霊を心から吊っていたからであろうということだ。

人間には心があり、心があるから不思議な存在になりうるように思います。

科学万能の世に、幽霊船などないところですが、

古老の話を聞いてみると、

そのような例は世の中にごまんとあって、

心のエネルギーの凄まじさを物語っているかのようです。

幽霊船

<http://p.booklog.jp/book/104538>

著者 : yae-mon

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/yae-mon/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/104538>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/104538>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ